Fancy Fragments oF "Fantasy" Fitted For Feasible Facts Duologue Fallacy? Fair or False?

札幌市医師会
華岡青洲記念病院
華岡（はなおか）　慶一（けいいち）

今回のテーマは、「利己的な遺伝子が、利己的な動機（意図）を保ったまま、利他的振る舞い（行ない）をなし得たか」だ。矛盾を想起させる表現をわかりやすくするために――言い換えの功罪（Fallacyの可能性）を認めた上で、利用して――利己観念的（精神的）には意図されていないことが、結果として、利己意図に矛盾しない形で、物質的（身体的）に行われたかという観点で論じたい。当時は、好きだったレイモンド・チャンドラーの長編遺作からの、
"If I wasn´t hard, I wouldn´t be alive. If I couldn´t ever be gentle, I wouldn´t deserve to be alive." 1958@playback
――男はハードでなければ生きていけない（まわりはタフを勘違いしていた奴だらけだった）。しかし、優しくなければ生きて行く資格はない（でも優しさとは具体的にはなんだ？）――という好きなセリフをヒントに答えを探していた。しかし、中学生活では一向にその答えは見つかりそうもなかった（感情と行動の結果の経験値が少なすぎた。そして語彙も……）。この時は、割り切って――他者との関係的悟性の理性的演繹（仮説抽出検討）のポーズボタン（１回目の）を押して――母子契約に没頭する（逃げ込む）ことにした。それは、概ね中学時代は機能し、かなりの成果をあげた。高い偏差値目標も物量作戦でこなしていた（日本が負けた相手の戦術の一つ）。具体的には、中学生でありながら、従兄弟たちの大量の大学受験参考書の提供を受けた。当時の限られた受験情報からの分析では、「earlier is better」、ひたすら早く開始し、理解し、暗記し、演習することに尽きるという結論だった。それは今も正しいと思っている。具体的には……ということだ。私が出会った受験数学の天才（超高得点者）はほとんどこれを採用していた。その後、彼らが数学を専門としたかという問いの答えはほとんど「No」だが、チャンドラーの言う、論理的に徹底する（耽溺する）ことが創造性を阻害するかは、少なくともこのレベルでは心配に及ばない。それが問題になってくるのは（現代数学の言葉を理解して、問題の本質に迫るのは）、大学院修士を終えてからと岡潔も言っている。それに、大学入試に関しては、正解のある問題しか出題されない。常に結果を出すためには、海馬、側頭連合野、前頭連合野間の迅速かつ、強固なネットワークを作り固めなくてはならない。

だが私はいつも理解から入った（自明部分をスキップしなかった）。そして常に因果をたどり、必要十分条件を合理的に展開した。何と言ってもカーテシアンであった。きっと疚しかったのだろう。母との取引が……。数学は楽しかったが、これぞ天職という気分にはならなかった。真に自分自身が没頭できるもの（純粋経験・主客未分状態）が見つかれば、そこに過剰な脳報酬系アゴニストのような勘違いという偽りはない（カント的には全ては脳内妄想？）。それは――内因系が本質的である筈の――神の意図（私は不可知論者だが、もし存在するとすれば）への近道のはずだ。私は現在のところ、「利己的な遺伝子の利他的な振る舞い」に関してはオキシトシンの役割が重要と考えている。見返りを求めない行動が利他者に気付かれないところで自分自身に褒美を与えているのだと……この世界もそのエネルギーの補充によってようやく維持されているのではないか……自分もそのエネルギーを啜りながら今日まで生き延びてきたのではないかと（母からの？……）。実は、感性として、中学時代の猛勉強（のフリ）で薄々そのことには気づいていた。「世界の叡智」を読書した経験から、学校の授業のなんと薄っぺらなこと（薄いならまだしも所々破れていた）から、それは、本質的な叡智に迫っていないと感じていた。またその感覚は、ある恐怖感を私にもたらした。このまま単なる偏差値追求を続けると、もう引き返せなくなるのではないかと？　問題に集中していいアイディアを思いつき、解答している最中はとても気持ちがいいのだが、その後、妙な違和感（居心地の悪さ）が生じることがあった（これ以上はいけないと）。まるで、思春期の、妄想とその解消後（身体的でも精神的でも）の罪悪感のように。「そんなことをしていると依存してしまうぞ」と……。ここに自分の求めているものへの「考えるヒント」はない……では一体何処に？……。でも、今なら少しはわかる。それは物事の本質に迫ること（あるのかないのかも含めて）に対する恐怖だった。真実に迫ることや、それによって求められることに纏わる危険と代償は時に大きい（芥川にしても三島にしても、太宰や川端もそうだろう）。うーむ……、ここで、ポーズボタンを押して方向転換。

――私は、そもそも人間の脳の中には生まれつきに（アプリオリに）言語が備わっている（生成文法）と考える。使えるように鍛えるのではなく、自然に芽吹いて咲き誇るのを、邪魔をしないことである。更に言えば、実際に体験したという記憶にしても、脳の中にあらかじめシークエンス要素としてそなわっているエピソード・チャンクの組み合わせの順序（時系列？）記録かもしれない。その、連続を過去の記憶という外套を脳というフックにかけているだけかもしれない。とすれば、限られた字数で読み手（想定している特定の）の中にある感覚を呼び覚まそうとすれば、ベルクソンの言う、読者の脳（釘）に引っかかっている外套（芥川のレエン・コオト・Kappa？）の力を借りない手はない。この方法に習熟すると、「ファンタジーの世界」では言語を必要としなくなる瞬間があることを感じることができるようになる。……大分、寄り道してしまった。

次回、高校時代に経験したある科目における純粋経験――それに纏わる、今回気づいた重要な偶然とは思えない一致――の話をしたい。